目白三平ものがたり

中村武志

新潮社版

★目白三平ものがたり★

定価　一二〇円

一九五五年四月三〇日　発行
一九五六年五月三〇日　五刷

著者　中村武志
発行者　佐藤亮一
印刷者　山元正宜
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のもの本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

印刷　三晃印刷株式会社・製本　神田加藤製本所
© by T. NAKAMURA 1955, TOKYO ; Printed in Japan.

目次

目白三平の緬羊……五
目白三平と仙造叔父……三五
目白三平の温泉行……四六
目白三平とアイロン……六七
目白三平の元旦……八七
目白三平のネクタイピン……一〇〇
目白三平のボーナス……一三一
サラリーマン目白三平の日日……一四五

装

幀

鈴

木

信

太

郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

目白三平ものがたり

目白三平の緬羊

北海道で三平汁を食べること

国鉄本庁校正局校正課一級課員の目白三平は、時々地方の鉄道管理局へ出張する。北は釧路から南は鹿児島へかけて、全国に二十七の鉄道管理局があるが、彼はどこへ出張しても、その都市の三流旅館、いわゆる商人宿というのに泊る。或いは鉄道管理局で経営している鉄道職員宿泊所というのに泊るのだ。

一級課員三十五号俸の目白三平の出張旅費は、甲地即ち六大都市の場合には宿泊料として九百円、それに日当が百八十円、それ以外を乙地と呼んでいるが、この場合には宿泊料が七百三十円と日当の百八十円が貰えるだけだ。たとえ商人宿や鉄道職員宿泊所に泊っても、この出張旅費の枠の中で、一週間も出張すると、たいていは赤字になって東京へ戻って来ることになる。

しかし、目白三平は酒を一滴も飲まぬのだから、ほかの同僚に較べると、比較的楽な方だ。食後に、その土地の名菓とか果物を取寄せて食べる位が、せいぜい彼のぜいたくだからだ。同

僚が、旅館の夕食の膳の刺身とトンカツと焼魚とを眺めて、
「何だ、毎晩同じじゃないか。この刺身は少し古いようだね。それに、このトンカツはなんて薄いんだろう。こんなものはまずくて食べられないね」
などと不満を述べ立てても、目白三平はすぐには同調しない。
『いや、俺の家の夕食のお菜は、たいていこの焼魚一つにきまっているんだ。刺身とかトンカツは、一週間か十日にいっぺんなんだよ。大変失礼だが、君のところだって、わが目白家の献立とそう違う筈はないね。いつも粗食だから、せめて出張の時ぐらいうんと御馳走を食べようという気持はよく分るが、それではまるで交通安全週間とか、公衆衛生週間とか、そのほかの何々週間というのとそっくりじゃないか。つまり、交通安全週間の間だけは、一生懸命にみんなで協力して交通事故を少くするが、後の三百何十日かは、事故ばかり起していることと全く同じだね。一週間の出張を御馳走週間と心得て、日頃の粗食を棚に上げてぜいたくを云うのだが、さて帰宅すると、いつもの貧しい献立になってしまうというのでは意味がないね。君に逆うようで恐縮だが、一週間位の出張の間はどんなお菜でもいいが、せめて平常の食事の時には、もう少しうまいものが食べたいと思うね』
と、目白三平は、心の中でひそかに反対をとなえるが、しかし顔には出さない。
「君の云うように本当にまずいね」
と相槌を打っておいて、目白三平は、その言葉とは反対にいかにもうまそうに全部平らげてしまう。

大勢で出かけた時は別だが、目白三平は、独りで鮭の漁れる時期に出張で北海道へ渡ると、行先が、釧路鉄道管理局であろうと、旭川鉄道管理局であろうと、または札幌鉄道管理局であろうと、とにかく彼はそこの旅館に頼み込んで、夕食には必ず三平汁を作って貰い、幾日でも飽きることなく食べ続けるのだ。

目白三平は、この料理が自分の名前と同じだから愛好するのではない。彼はもとからこういうごった煮は何でも好きなのだ。三平汁は、松前藩の賄方の斎藤三平という人が創案したのでこういう名前がついたのだそうだが、この料理は、至って素朴且廉価な料理だ。鮭の頭とかあらとかを、色々な野菜のぶつ切りにしたものと一緒にして、塩味だけで煮たものだ。家庭で作れば一人前十五円か二十円位で出来るものだから、旅館ではいささか困惑する。

「お客さん、毎晩三平汁ばかり食べて下さっては、宿料を頂戴しにくいんですが、今夜だけはせめてお刺身とトンカツと焼魚を召し上がって頂けませんか」

と、三晩目位には必ず女中が云いにやって来る。

「いや、今夜もぜひ三平汁にして下さいませんか。刺身やトンカツはたまには東京でも食べていますが、三平汁は北海道でなければ食べられませんからね。それに、お宅はこの町では宿料が一番安い旅館なんですから、そんなに気にしないで僕の好きなものを食べさせて下さいよ」

と、目白三平は懇願する。

緬羊の次に細君を思い出すこと

目白三平は、三平汁で夕食を済ませると、すぐ女中に床を敷いて貰って、自分の家の蒲団とたいして違わない固いせんべい蒲団の中にもぐり込んで、トーマス・マンの『欺かれた女』などを読み出す。といってももちろん原書なのではない。ある週刊雑誌の書評に、更年期の婦人の生理問題を諷刺的に扱ったちょっと変った小説だ、と書いてあったので、気が引かれて読みたくなったのだ。単なる興味本位の気持からではなく、四十五歳の目白三平にとってはこと男女を問わず、更年期に関すること一切が気にかかってならない。子供がまだ小学校六年生であって見れば、何としてもまだまだ長生きをしなければならないからだ。

本を読み飽きると、目白三平はじっと眼をつぶる。そして、

『子供のやつは、今夜もまた女房から宿題の算数を教えて貰っているだろうな。どうもあいつは少し思考力が足りないようだな。根気よく考えればすぐ分るんだが、もうちょっとというところで嫌になって、いつでも女房に教えて貰うんだから困ったやつさ。しかし、まあ健康で育ってくれさえすれば、算数なんか少し位出来が悪くてもいいとしなければならないだろうな』

などと、東京に残して来た子供のことを第一番に思い出す。続いて目白三平は、彼が所有している一匹のコリデール種の牝の緬羊をなつかしく思い起すのだ。本来ならば、子供に続いて第二番目に、ミシンを踏んだり、セーターを編んだりして、一生懸命に内職に励んでいる細君

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

のことを思い出すべきだが、ありていに云うと 目白三平は、子供の次に必ず緬羊のことを思い出すのが、ここ二、三年来の旅先でのシキタリとなっている。しかし彼はこのことを細君には絶対に秘密にしている。若し、目白三平が、そんなことを正直に細君に伝えようものなら、

『第一番に子供のことを思い出すのは仕方がありませんけれど、二番目にコリデール種の緬羊を思い出し、最後に漸く私を思い出すなんて、随分失礼ですわ。人権蹂躙よ。あなたや子供のために一生懸命働いている私を、いくら何でも緬羊の後で思い出すなんてことは、これはただ単なる私だけの問題ではなく、女性一般に対する大いなる侮辱ですわ』

と、細君は必ず云うにちがいない。

どういうきっかけからこの秘密を細君に洩らすかも知れないので、目白三平は、このような細君の非難攻撃に対して、あらかじめ次のような答弁を用意している。

『お前は随分大袈裟なことを云うんだな。人権蹂躙だとか、女性一般に対する侮辱だとか、そんな大問題ではないね。旅先のつれづれなるままに、お前のことより先に、緬羊のやつは今頃どうしているんだろうとちょっと思い出したところで、何でもないじゃないか。つまり、子供と緬羊に対しては、俺には庇護しなければならない義務があるんだ。それで、庇護者としての立場から、一番目に子供、二番目に緬羊を思い出しただけなんだ。そこへ行くと、お前は立派に一人前の人間だから、俺なんかが特別に庇護しなければならないところはどこにもないわけさ。……これは陳腐な例だが、空気や水の重要さや有難さを、お前は始終思い起しているかね。多分思い出してはいないだろう。それと同じだよ。思い出さないものは重要ではない、と

いうロジックは成り立たないが、また、第三番目に思い出したものは、第一番目と第二番目に思い出したものより重要ではない、などというロジックも成り立たないさ』

目白三平が緬羊を貰うこと

国鉄本庁一級課員の目白三平は、どういうつもりで、コリデール種の牝の緬羊を飼っているのであろうか。それに、現在の借家の庭は、せいぜい二坪位しかないのだが、そんな狭い庭にどのようにして緬羊小屋を建てているのであろうか。緬羊は、草という草はもちろんのこと、木の葉、野菜、芋類など植物という植物は何でも食べるから、他の動物よりは比較的飼い易いとはいえ、東京都新宿区下落合あたりで、その飼料をいったいどういう方法でまかなっているのだろうか。

実は、目白三平は、彼の所有にかかわるコリデール種の緬羊を、埼玉県大里郡吉岡村の三輪新吉のところに預けてあるのだ。三輪新吉は、目白三平の遠い親戚に当っていて、やはり四十五歳だ。

三輪新吉が、昭和二十六年の夏に上京して目白家に泊った際、何かの話のついでに、目白三平は次のような愚痴めいたことを云った。

「洋服が全部駄目になってしまってね。裏返しをしたのを、また裏返している始末さ。現在のサラリーで作れるのは、せいぜいワイシャツまでで、洋服まではいつまで経っても手が廻らな

いんだ」

すると、三輪新吉が、

「そうか。それではいいことがあるね。僕のところの緬羊を君に一匹ゆずってやろう。一年毎に洋服一着分の羊毛が取れるからね。来年の春には、君の背広が新調出来るよ」

と、どうだ、これならいいだろう、という顔をして云った。

「おい、おい、冗談じゃないね。御覧のように、ここには緬羊小屋を建てる場所がないし、たとえ土地があったにしても、その費用がないね。君の御好意は有難いが、それだけは御辞退するよ」

と、目白三平は慌てて断った。

「いや、心配するな。緬羊は無代で君に差上げるし、それにもちろん今まで通り、僕の家で飼ってやるのだよ。ただし、飼料代は君の方で持ってくれないか。飼料代といっても、一日十円でいいね。つまり、うちの子供でもいいし、近所の子供に頼んでもいいが、十円もやれば喜んで一日分の草を刈って来てくれるよ。一ヵ月で三百円というわけだ。それから、四月の中旬から五月の上旬頃、緬羊飼育協同組合の人がやって来て、毛を刈ってくれた上、それをすぐに洋服地とでも毛糸とでも好きなものと交換してくれるんだ。色とか柄をいっておけば、希望通りの洋服地を届けてくれるよ」

と、三輪新吉が云った。

こういう有難い申出なのだから、目白三平には文句があろう筈はなかった。目白三平は三輪

新吉から、その場で一匹のコリデール種の牝の緬羊を貰い受け、またその場で直ちに三輪新吉に預けてしまった次第だ。

目白家における家族会議について

その翌日、三輪新吉が埼玉県の吉岡村へ帰ってしまうと、目白家では早速家族会議が開かれた。夕食後、細君がその口火を切ったのだ。

「三輪新吉さんって随分御親切な方ね。毎年一着ずつ洋服が作れるのは有難いわ。それで、その時になって、色々問題が起ってはいけませんから、今のうちに洋服を作る人の順番を決めておきましょうよ。来年、即ち昭和二十七年には、子供にオーバーを作ってやりたいわ。よろしいでしょう。子供のオーバーですから、別にセーターと手袋と靴下を編む位の毛糸が貰えるんじゃないかしら。……次の二十八年には、あなたと私とどちらにしましょうか」

「そりゃ、俺の方が先だろうね。お前も知っている通り、冬服がもうどうにもならなくなっているからね。それに、みんなはどうして作るのか知らないが、近頃は服装がとても立派になって来ているからね。俺だけあんまり変な恰好もしていられないからね」

「でも、もう一年位は何とか着られますわ。去年の冬でしたか、まだ三、四年は着られるだろうって、あなたはおっしゃいましたわ。あなたのに較べたら、私の合着なんかもっとひどいんですわ」

「そうかも知れないが、俺の方は毎日勤めに出ているんだからね。余りひどい服装をしていると、みんなから軽く扱われることにもなるからね。カーライルの衣裳哲学の中にも、それぞれの身分や地位に相応しいちやんとした服装をすべきだ、ということが書いてあるよ。つまり王様には王様としての威厳を保つための服装、国鉄本庁校正局校正課一級課員三十五号俸の俺にもそれに相応しい服装があるんだよ。今の服装はちょっと落ちると思うね」

「カーライルさんがなんておっしゃったか知りませんが、何もそんな昔の人の言葉まで持ち出さなくってもよろしいわ。あなたのおっしゃることはよく分りますわ。そういう云い方をなさるならば、私だって国鉄本庁校正局校正課一級課員三十五号俸目白三平の女房に相応しい服装をしていませんわ。相当落ちる服装ですわ。それに私はＰＴＡの役員をしているんですもの。あんな服で会合に出かけて行くのは困りますわ。いえ、私は構いませんけれど、結局あなたという人が、働きがないってことを女房の私が宣伝して歩く結果になるんですから、それが困るのよ」

「そういうわけかね。まあ、仕方がない。俺は諦めるよ。再来年はお前の合着を作ることにするさ。ところで、念のために聞いておくが、昭和二十九年には、間違いなく俺の冬服を作ってくれるんだろうね」

「もちろん云うまでもありませんわ。もうあなたもお若くないんだから、濃紺か鼠の地味なものを作るとよろしいわ」

こういういきさつで、目白三平の冬服の新調は、三年先の昭和二十九年までお預けというこ

とになった。

目白三平がワイシャツのボタンをつけること

目白三平が所有するコリデール種緬羊の、昭和二十八年度に収穫した毛で、細君は、最初の計画通りウーステッドの合着を作った。今までは、あまりＰＴＡの会合に出席しなかった細君も、合着を新調してからは、会合のある度に欠かさずいそいそと出かけて行く様子であった。

目白三平は、細君に合着を作ってやってよかった、とひそかに思った。

『こんなことを云うと、また叱られそうだが、ＰＴＡというものは、結局女房のレクリエーションなんだな。今まで長い間家にばかり引き籠っていて、炊事や洗濯ばかりやっていたんだから、外出することが珍しいにちがいないが、それよりも、ＰＴＡの会合の席で、男に対等に自由にものが云えるってことが、女房を楽しくさせているんだな。それにしても、俺の女房がＰＴＡの文化部長だというんだから、こいつはいささか心配だね。あんまりヘマなことをして貰いたくはないからな。しかし、まあ読書会とか映写会とか、新聞社、放送局、博物館、美術展の見学、それにハイキングというようなことをやっている間は、そう心配することはないだろう。とにかく、ＰＴＡに熱心になってからは、俺に対しても昔のように文句を云わなくなったし、子供をガミガミ叱りつけることも少くなったようだが、これはなかなかいい傾向だよ。その代り、ワイシャツのボタンをつけ忘れたり、靴を磨かなかったり、頼んでおいたハガキを買い忘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo